



平成 28 年 11 月 25 日 グロー法人本部にて

中島 秀夫さん

(社会福祉法人グロー理事)

滋賀県出身。二年間ほどサラリーマンをされた後に、社会福祉法人しがらき会信楽青年寮に入職。信楽青年寮では、主に園芸班、企業出向班、陶芸班 1 日中活動に携わっておられました。その中で、法人が地域療育拠点施設事業(通称: コーディネーター事業)を受託したことを契機に、滋賀県で二人目のコーディネーターとなります。その当時、主流であったコーディネーターの業務手法である、待ち受け型相談から、家庭訪問や事業所、行政等の訪問を行う、アウトリーチ型相談に切り替え取り組みを始められました。また、障害児、者サービス調整会議(今日の障害者自立支援協議会)を拠点として、様々な問題で困っている相談者を地域で支えるようなネットワークづくりの活動を行ってこられました。現在も相談員としてケースワークを行う傍ら、滋賀県障害者自立支援協議会事務局長等も担っております。

施設の職員から地域の相談員へ

廣岡 まず、中島さんが福祉に携わられるようになったきっかけをお聞きしたいのですが。

中島 私が、福祉の仕事にしていたのが一九七九年なんです。それまではサラリーマンをしております、そこからの転身で、障害福祉の世界に入ったんです。生まれが信楽だったもので、そこには信楽青年寮という知的障害者の入所の授産更生施設があったんです。元々、入職する前から青年寮については知っていて、その求人がたまたまが出ていて、職場は近い方がいくらいの安易な動機で、応募してみたんです。そしたら当時の施設長であった池田太郎先生が、面接をしてくださって来なさいということで、入職することになったんです。入職してからは、日中活動の支援をやるが多かったです。例えば、園芸班で畑の仕事を支援したり、一番長い間やっていたのが陶芸班で、そこには一一年くらいいましたね。入所の仕事を一六年間ほどした後、一九九五年に今の相談の仕事に行くことになるんですけど、きっかけは当時、同じ信楽青年寮の副寮長であった北岡さん（現在社会福祉法人グロー 理事長）から勧められたんですけど、陶芸班での仕事が楽しかったので、ずっと断っていたんですよ（笑）。そんな時に、全国のコーディ

ネーターの研修会があるから一緒に行こうと言われて、それに参加することになったんですね。そこで、全国各地の先輩のコーディネーターの方々がこれからどう進めて行ったらいいかなど、熱心に議論をされている様子を見て、面白そうやなと思ったんです。

廣岡 なるほど。その研修に行ってみたのが、相談の仕事をされるきっかけになったんですね。

中島 ずっと施設の仕事をしていた中で、コーディネーターの仕事は、地域福祉、在宅福祉の仕事なので、全く知らない世界でした。当時、これからは地域福祉の時代だとも言われていましたので、何か新しい面白みがあるんじゃないかなというのを、その研修会に参加したことで感じられたんですね。その研修会の翌年から、実際に相談業務をやることとなったんですが、当時コーディネーターの仕事は、受託した施設の仕事になっていると言われていたんです。例えば、法人に事務所を構えて、ショートステイの依頼があったらその調整を計ったりしていたんですね。確かに在宅からの依頼ではあるんですけども、施設に在宅からの受付窓口のような待ち受け型手法が当時は主流だったんです。でも、さっきも言ったようにこれからは地域福祉だという時代だったり、信楽青年寮でも二四時間対応のホームヘルプとかも始まったりしていたので、相談も

閉じこもっていたらあかんということまで、そして施設に机がなくなっている(笑)。

廣岡 机がなくなっていたんですか；、すごいですね(笑)。

中島 そこから、家庭訪問を中心にどんどん外に出て行って、地域の関係機関、養護学校、行政機関、当時は市町村合併する前でしたので、甲賀郡七町の町役場とか県福祉事務所を周りながら仕事をしていたんです。そういう相談のやり方で、今で言うところのアウトリーチというのをやり始めたんですね。あと、もう一つはコーディネーターの活動のプラットフォームとして、甲賀郡心身障害児者サービス調整会議を県福祉事務所が音頭をとり、七町との共同事業として作ってくれはったんです。それで、コーディネーターは、そのサービス調整会議をベースに仕事をするということになったんですね。地域の中で一法人の相談員としてではなくて、甲賀郡域の相談員ということですね。そのサービス調整会議の場というのは、行政と民間が一緒に集まる場になるんです。今の自立支援協議会みたいなもので、その場で自分の活動報告や地域の課題も報告して、そこで地域の課題を考えていくというスタイルが、今から振り返るとですけど、結果的に作りあげられてきたのかなと思いますね。当時はそんなこと全然考えてなくて、とにかく、外に行って仕事をしないといけないから家庭訪問行って、当事

者から色々お話を聞いて周っていたんです。その中で困ってはる人がいた時に、この問題については、誰と一緒に考えた方がいいのかというチームづくりのこと等を考えながら地域を渡り歩く中で、仕組みというか、徐々にネットワークが出来てきたんですね。当時の全国のコーディネーターの主流の活動方法とは違う活動だったので、一挙に注目されたわけなんです。

廣岡 なるほど。でも、ネットワークを作っていく中で、当時としては前例のないことだと思うので、難しさはなかったんですか？

中島 前例がないことがよかったですね。モデルがなかったのですが、サービス調整会議を作ってくれたのは行政だったのですが、それをベースに活動するということが、具体的に、当時の県福祉事務所のケースワーカーや町役場の担当の人にも一緒に訪問しましょうと声をかけたところ、二つ返事で一緒に訪問してくれましたよ。ただ、学校とか地域の作業所とか就学前の療育教室等に入り込む際には、少し何でということを言われたりしたことはありました。自分としては、地域の相談員という思いで動いているもの、周りからは一法人の事業、職員と見られることが多かったからなんです。

廣岡 そういった難しさがある中で、地域のネットワーク

を作っていないかといけない状況で、どのような工夫をされていたんですか？

中島 地域の社会資源を利用されている方々というのは、それぞれの関係機関が関わる対象者であり、コーディネートの対象でもあるわけですね。自分からすると当時の甲賀郡在住全ての障害児、者が対象なわけですね。例えば、Aという作業所に通っておられて、そこで活動しておられても作業所は昼間の様子しかわからないわけじゃないですか。でも、生活のことで困っておられる場合もあって、家庭訪問へ行くとそういう話が出てくるわけですよ。そういう話を作業所の方に持ち込んでいくと、作業所としても、自分たちの事業所の利用者の情報なわけですから無視できないですよ。そういう形で、その事業所に所属している人のことを取り上げてつながりを持つようにしていました。そういったことを地域で積み上げる中で、一法人の職員という認識から、地域のために活動している相談員という認識に変わっていて、認知度も上がっていったと思いますね。

このケースがあったから、

地域のネットワークがより一層…

廣岡 これまで地域の相談員として、活動してこられた中

で印象的なエピソードをお聞かせください。

中島 地域を作っていく時に、ポイントとなったケースとしてやっぱりあるんですよ。そのケースの中で言うと、お子さんが三人おられる父子家庭で、お父さんは仕事をばりばりしておられて、二人目の、当時小学四年生のお子さんが障害を持たれていたんですね。お父さんからの相談は、自分が現役世代で会社の中核にいるような年代で、残業もあるし朝も遅刻するわけにはいかないから、何とか応援をしてほしいということだったんです。養護学校のスクールバスが自宅近くまで迎えに来てくれるんですけども、お父さんの出勤時間の方が早かったんですね。ということで、当時の支援センターれがーとがお父さんの出勤前に迎えに行つて、れがーとまでお連れして、そこからバスに乗って学校に行くという朝の組み立てをれがーとの協力も得ながらやっていたんです。それで、夕方学校が終わってから、お父さんが帰ってくるまでれがーとで過ごしてもらおうということをしていたんですね。でも、問題となったのが、平日の夕方全部対応することに無理があった。当時のれがーともそんなにマンパワーがあったわけではないので、毎日利用者の多い夕方の時間帯にヘルパー一人とられちゃうと、他の利用希望者のサービス提供に影響が出てしまうというところで、週三日くらいが限度という話が出てきたんで

す。そこで、残りの二日を何とかする方法はないもんかと考えるわけです。今は放課後等デイサービスとか様々なサービスがあるので、そういうことを考えなくてもよくなった時代だと思うんですけど。何とか放課後対応が出来ないかと考えて、学校に相談したんですよ。養護学校の校長先生、担任の先生に会いに行つて、こんな状況だという説明をして、何とか学校も応援をお願いしたんです。

廣岡 そうなんですか。それでも、直接行つて、話を聞いてもらえるものなんですね。

中島 そりゃ最初は、もうめちゃくちゃ厳しかったですよ。学校側からしたら突拍子もない話なわけですから。そんな対応を一人やりかけたら広がって、学校は放課後対応をしなくちゃならなくなってしまう、学校の先生は、次の日の授業の準備で忙しいのにと、断られ続けたんです。でも、これは何とかしないと家庭が成り立たなくなってしまうと思ったので、とにかくここは個別性重要という主張をしてね。学校が主張する、一人の人の支援をやったらみんなやらなあかんっていうのは公平性を考えてのことだと思っただす。でもこれは、公平性じゃなくて家庭のあり方って個々に状況は違う、一人一人異なる家庭の状況に合わせて対応する必要があるんじゃないかと。困っていてどうしても支援が要る人には、やっぱりその公平性の部分を壊してい

ないと、みたいなやり取りをし続けるわけですね。それがたまたま校長先生に響いたのか、こちらの考えを受け入れてくれたんです。仮に、他の保護者からあの子だけと言われた時でも、家庭の状況が違つと、ちゃんと説明ができるんだつたらいいんじゃないかということですね。実はこのお父さん、急に奥さんが亡くなられたんですよ。それで急に生活が変わつてしまつて、働き盛りのお父さんの会社での立ち位置を考えると、変化した生活に合わせて仕事を組み立てるのが難しいということがあったので、学校の協力も得て放課後対応してもらつて、私が相談の立場で学校にお迎えに行つて、お父さんが帰られるまで少しドライブしながら、ゆっくりお家に帰つてお父さんに引き継ぐというようなことをやっていたんです。サービスが整っていない分、地域全体がみんなで支えていこう、学校も福祉もみんなで支えていこうという風潮があつて、良い時代だったと思いますね。

廣岡 何というか、今のようには明確に役割分担されていないからこそ、足りない部分を補いあつていたような感じですね。

中島 そうですね。そんな時代だったからこそさっきのケースも上手くいったと思いますし、そういうケースが、より地域のネットワークを強めていくと思うんです。また、

私たちとしても、そういうしんどい事情を抱えた人たちでも、ちゃんと暮らしていける地域を作れているということが実証出来ているようなものだと感じていて、それはものすごく支え甲斐があるとともに、地域の福祉力を高めているのだと思います。

しんどい時こそ、チームで乗り切る

廣岡 当初のサービスのない時代から、ある時代へと変化してきたことによって、新たな難しさも出てくると思うのですが、そのあたりで何か工夫をされたり、意識されていることはありますか？

中島 自分がやっていた時にも、やっぱり自分一人で相談を聞いて、それを受けとめてやっていたら、続いてなかったと思います。自分はどっかで相談の仕事から逃げ出していたと思うんです。でも、地域にはそういうネットワークやチームがあって、そのチームに実はこんな話を受けて困っているんだけどみたいな話ができて、みんな考えてながらやれるような土壌があるから続いているんだと思います。それは、今の人もそうなんだと思うんですよ。なので、やっぱり抱え込まないでチームでやるっているのは、大事なことですよね。

自分の場合は、本当に周りの人達に恵まれたと思いますし、それだから一人で抱え込んでやってこなかった。確かにスタートのところはゼロからでしたけれども、徐々に徐々に、色んな理解者が増えていったりとか、自分の職場の後には力強い仲間が、当然いたわけですから。そういう意味で言うと、本当に色んな人に支えられてやって来れたのだと思います。だから、自分は地域のネットワークづくりということでは一生懸命やってきたわけですが、自分自身のネットワークも環境に非常に恵まれたと思っていますね。

廣岡 なるほど。人と人とのつながりが支えとなっていたんですね。

中島 当初はまだ始めた頃でしたから、色々な構想を話しながら食事も皆でしながらね、合宿状態のような感じでやってた時期もあったんですけど、そういうことも含めてやっぱりチームやなと思いますね。自分の仕事を取り巻く環境の大切さ。あと、この仕事の魅力っていうのは、どんな仕事でも通じることだと思うんですけど、やっぱり足跡が残るとか、見えるというのは魅力ですよ。こう仕組みとか、ネットワークっていうのは残っていくんですよね。で、目に見えないけど、ちゃんと無形で残っているんですよ。当然広がっていきますし、それが感じられるから、ちゃ

んと積み上げていけば残るんだ、それがさらに発展していくんだという、そういうところってこの仕事の魅力じゃないですかね。

廣岡 ああ、なるほど。そうですね。

中島 コーディネーターになって話をする際に、相談の仕事ほど福祉業界で色んな方々と出会う仕事はないというふうによく言ってきたんですよ。だから、みんな相談の仕事面白いよって。色んな人と関わるということは大変なんですけど、面白いですよ。ところが、自分が施設の職員やってた時代を考えると、やっぱり施設の中で仕事をしていると、施設の人脈+aももちろん地域との人脈はあるにはあるんですけど、範囲が狭いじゃないですか。相談は、もう本当に広いですよ（笑）。自分で広げようと思ったら、どんどん広げていきますからね。

垣根をとっばらい、共生社会へ

廣岡 今後の構想とか、後輩に期待することなど、今後もつと障害福祉がこうなっていけばいいなという構想みたいなものがあるとお聞かせください。

中島 これまでは、障害福祉は障害福祉という制度や施策や仕組みの中でやってきたと思うんです。自分もそういう

枠組みの中でやってきたんですけど、これからの時代は、やっぱりその枠組み、分野の枠組みをとっばらっていく時代に入っていくと思うんですよ。よく言われてますけど、障害を持つている人が高齢になった場合の話とか。障害のある方々もだんだん高齢になってきて、介護保険云々ということが言われていると思うんですけどね。そうになると、高齢分野としつかりと連携しないといけないわけです、子どもの問題もね、今児童福祉法に変わっていったって、考え方が徐々に障害あるなしに関わらずになってきましたからね。昨今で言うと、生活困窮者自立支援事業もそうやと思うんですけどね。生活困窮者の内、少なくとも割合の方が、障害を持っているとよく言われていますよね。でも、当然ない人もいるわけじゃないですか。だから、そういう障害があるかないということじゃなくて、地域の住民としてね、色んな生活のしづらさを抱えている人がいる。困っている人は障害者だけでなく、いっぱいいるわけですよ。今までの枠組みで物事を考えていくんじゃないって、もう少し広い意味で枠組みとか地域を作っていくことが、これから求められていくんだらうなと思った時に、それを開いていくのは、今の若い人なんだらうなというふうに思っています。

廣岡 なるほど。現況の仕組みや制度の枠の中だけで、物事を考えるのではなくて、より広い視野で物事を考えるこ

との出来る人材が次世代を担う若い職員から出てくることに期待されているということですね。

中島 あと、それとは別に、自分の体験として、信楽青年寮時代から、今で言うスポーツ推進員（当時は体育指導委員）という制度があつて、二六年ボランティアをやっていたんですよ。その時も思ったんですけど、例えば、地域でレクレーションスポーツ教室やるので来てくださいということ、信楽の町内の色々な地区を周りながら、案内してきたわけですよ。しかし、残念ながらそこに障害のある方々ってなかなか出て来られないんですよ。そのことは自身の反省でもありますが、問題だと思つていたんですよ。地域に、障害者は必ず住んでいるはずなんですよね。ところが、地域の活動呼びかけた時に、障害者の方は出て来られない、なぜかと言うとそこには、やっぱり差別化意識と当事者側の遠慮があつたと思うんです。

廣岡 なるほど。そういうった事情が地域の中の課題として、あつたわけですね。

中島 地域の中に、社会の中に意識として差別化意識があつたんだと思うんですよ。それをいかに障害のある方が来やすくするか、地域がどう受け入れて活動に参画しやすくするかということ。今も共生社会と言ってますけど、それができることが本当の共生社会の一步だと思つてます

よ。そういう仕事というか、お役目をやってきたというのもあつて、障害のあるなしに関わらず、レクを楽しんでいることを信楽の町で出来ひんかなとか考えていますね。

廣岡 障害のあるなしに関わらず、みんな地域交流できるような場を作りたいということですね。

中島 そういうことが、共生社会の一つの手がかりになるのかなということ、もう一つ広い意味で分野を越えた色々な活動が地域づくりにつながっていくんじゃないかなって考えていますね。

廣岡 ありがとうございます。今日はお忙しい中、本当に色々なお話をお聞かせいただきありがとうございます。ありがとうございました。